

## 英語学研究室の専門演習と卒業演習の紹介

ことばには、当該言語の体系で決まっている部分と、話し手が自由に動かせる部分があります。前者の代表は単語の発音と文法です。例えば、英語で猫のことを言う場合、cat を[kæt]と発音しないと通じません。話し手は自分の好きに cat を[kɔt]と発音することは許されないわけですが（ロシア語ではオス猫のことを kot と言います）。また、文法も体系的に決められています。英語で「私は家で猫を飼っています」は I have a cat at home. という文になりますが、英語の文法では I at home a cat have. や I a cat have at home. といった語順は認められません。従来の研究は言語の体系を明らかにするため、話し手が自由に手出しできないことばの特徴を主な対象としています。これは研究の体系性という点では極めて有用ですが、これでは話し手の個性が見えてきません。もっと言うと、音声学や文法論は英語や日本語といった言語の骨格にあたる部分を相手にしていても、その言語の話し手が全員、規則的に従うところを扱って、個別の話し手の顔は見ないようにしているわけです。

一方、ことばには話し手が自由に動かせるところもあります。日本語の身近な例では、「今日は雨です、今日は雨だ、今日は雨だぜ、今日は雨ざます」など多様な文末表現があり、その選択で誰が誰にどう話しているか文脈が再現できます。同じものを指すのにも言い換えが効くこともあります。味噌汁は「お味噌汁、おみおつけ、おつけ」などとも言えて、それぞれ話し手のイメージが変わってくるでしょう。醤油のことをムラサキということもありますが、場面が限られます。英語でも、child と kid は、ほぼ同義ですが、使う場面は違います。語彙の選択のように、ことばは、単語の発音や文法といった言語の骨格から離れれば離れるほど、話し手が自由に変えられる部分が増えます。言語体系を重視する研究から見れば周辺的で、些末的できえあることばの使い方こそが、一人ひとりの話し手が自分の個性を表現しようとする際に重要になってきます。

このような問題意識のもとに、英語学研究室のゼミでは、各自が選んだテーマに沿って、ことばの使い方のしくみを探究します。英語学や英文法の基礎的な知識が必要ですが、身近なことばに対する関心が最も大事です。卒論に向けた中間発表と最終発表は英語で行い、卒論も全て英語で書きます。普段から英語を使う習慣を身につけ、英語を勉強の対象から、便利なツール、さらに娯楽や自分の職業も見つけられるキーに展開させていきましょう。